

# 人間存在としての「生」の回復について

## Overcoming Human Alienation

佐藤 瑠美  
Rumi SATO

*Keywords* : alienation, humaness, Marx, Merleau-Ponty

キーワード : 疎外、人間、マルクス、メルロ＝ポンティ

### 1. はじめに

本論文は、今日における人間存在の課題とそれに対応する「生」の回復についての論述を目的としている。人間の存在論については主に哲学の課題として議論されてきた。本論文では、そのなかでも労働と社会の関係性に光を当て、労働の概念を用いる方法で、研究を出発している。

人間の「生」を捉えんとする場合、後述するマルクス<sup>(1)</sup>らによる業績の蓄積は論拠として重要である。それらの論理に基づき、労働の概念規定を行った場合、2つの類型に大別できる。一方は「生命と一体」として捉えられる労働概念があり、他方では近代を特徴づける労働の在り方としての「賃労働」とに分類できる。いずれにせよ、この労働概念の変遷をたどる過程は、人間の「生」の一側面を明らかにする試みと考えられる。

以上により、本論文における「生」とは、先述した前者としての「労働」の視点から捉えた人間の在り方と規定している。

この試みを踏まえて、メルロ＝ポンティの現象学の視点によって、「生」の概念の一つの捉え方を示している。

以上の2つの過程から導出される結果に基づき、「生」の回復について今日必要な視点を提起する。

#### 1.1 労働の起源

人類が歩み始めた時から労働は、どのように捉えられていたのだろうか。古代から近代までの労働史をおさめたジョルジュ・ルフランの『労働と労働者の歴史』によると、労働という言葉はラテン語のトリパリウムに由来する。この語は、三つの棒杭のついた道具という意味であ

り、強情な馬に蹄鉄をつけたり、手術するときに縛りつけるものである。ここから一般に、責苦、拷問、苦しみという意味に転じた。16世紀以降になると、この語は今日人々が用いているのと同じ意味になる。そして中世になると、耕作と仕事という二つの意味に転化して用いられるようになったのである<sup>(2)</sup>。

古代ギリシアにおいて、手仕事はメカニックな労働と呼ばれていた。メカニックという言葉には軽蔑的な意味が付きまとい、メカニックな労働としての手仕事は、汚らしく恥ずべき職業としてみなされてきたという。商業においては職人の労働よりももっと劣等であると非難されてきた歴史がある。こうした手仕事一般に対する労働観が存在するのは、奴隷制度がその背景にあると理解されてきた<sup>(3)</sup>。このように労働とは、蔑みの意を含んだ古代の労働観が語源に含意されている。

『人間の条件』において古代の人間観を独自の視点で分析し、その正体に迫ったアレント<sup>(4)</sup>の考察も参考にしたい。「労働に対する軽蔑は、もともと必然（必要）から自由になるための猛烈な努力から生まれたものであり、痕跡も、記念碑も、記憶に値する偉大な作品も、なにも残さないような骨折り仕事にはとても堪えられないという労働にたいする嫌悪感から生まれたものである」(Arendt, 1958)<sup>(5)</sup>。奴隷制の背景と相まり、生命の存続のために逃れられない苦役が元来の労働である。そして労働は、物作りの材料と同じ程度には必要であるが、その材料と同じ程度に無価値である<sup>(6)</sup>。また労働とは、人間が余儀なくしなければならぬ毎日の仕事等と述べられているように<sup>(7)</sup>、元々、労働とは生存するための必要性と一体と捉えられてきた。しかもそれは奴隷制の背景があることにより、苦役や無価値との表現が残されている。そうした忌み嫌うべきものとして労働は認識されていたのである。

## 1.2 2つの労働概念

労働は元々人間の発現以来、生命と一体的概念であると冒頭に示した。それは現代に継承される流れのなかで、概念が変容してくる。それを踏まえた上で労働について論じるのであれば、大概2つの概念に区分けできる。それは「生そのもの」の労働と経済的生産性を主な目的として他者に労働力を売却する形の「賃労働」である。この両者の労働概念について、いくつもの議論が行われてきた。

例えば濱本真男の場合、労働の概念はつねに過少もしくは過剰に定義されているという。過少というのは近代以降の一般的な定義を示している。労働の過少の定義とは、資本主義の論理に基づく生産関係に還元された経済活動のことを指している。現代の人々が一般に認識している種類の労働である。それはつまり資源を用いた生産手段と生産対象を伴い、分業と交換を重ねて、生存に必要な物資やサービスを他律的に充足させる営みを指す<sup>(8)</sup>。他方で労働の過剰の定義とは、生の所産に係わる形態が社会的な規模での分業と交換へと拡大され、それによる富の蓄積から資本主義経済の発展へと連なる過程を貫く原動力であった近代的労働としての側面に加え、「生そのもの」としての側面が加えられたものとの見方である<sup>(9)</sup>。

ここから逆説的に考えられることがある。元々労働は「生そのもの」であった。しかしその後18世紀中盤にヨーロッパを起源に産業革命が勃興し、資本主義経済が幅を利かせ、近代を形成するに至った。経済的効率を促進するために分業と調整を重ね、後には機械化が導入された。いつしか労働者はその分断された労働の一部分の枠に収まることになったのである。「生そのもの」であった労働から生み出された「賃労働」が切り離され、その概念は近代において定着していったのである。このようにして多くの人間の労働が「賃労働」として認識されるようになっていったのである。

現代では、一般的に「仕事」の概念が用いられるのが通常である。現代の「賃労働」と「仕事」の概念について先行研究を参照しながら本論文における両者の関係性を示す。以下は、アレントの仕事についての概念規定である。

仕事workとは、人間存在の非自然性に対応する活動力である。人間存在は、種の永遠に続く生命循環に盲目的に付き従うところはないし、人間が死すべき存在だという事実は、種の生命循環が永遠だということによって慰められるものでもない。仕事は、全ての自然環境と際立って異なる物の「人工的」世界を作り出す。その物の世界の境界線の内部で、それぞれ個々の生命は安住の地を見出すのであるが、他方、この世界そのものはそれら個々の生命を超えて永続するようになっている。そこで、仕事の人間的条件は世界性である(Arendt, 1958)<sup>(10)</sup>。

このように、仕事が永続的な世界性をつくり上げることに對して、労働は生命そのものに条件づけられると、アレントの場合は労働と仕事の概念とを区別して規定している<sup>(11)</sup>。

日本において労働の概念は、近代に入ってからLabourの訳語として用いられるようになった。それが一般的な働くこととして現代まで引き継がれている<sup>(12)</sup>。

今日、一般的な見地を確認してみると、労働とは「ほねおりはたらくこと。体力を使用してはたらくこと。人間が自然に働きかけて生活手段や生産手段をつくりだす活動。労働力の具体的発現」<sup>(13)</sup>。である。一方仕事とは「する事。しなくてはならない事。特に、職業・業務を指す。事をかまえてすること。また、悪事」<sup>(14)</sup>。と述べられている。両者を比較すると、仕事においては賃金を稼ぐという意味合いが含まれている。一方で仕事と労働とが重複している部分もあり、現代においても明らかに区別して用いられる規定はない。本論文の「労働の起源」において、労働がまとう苦役のイメージが働くこととして一般的に浸透して用いられている。そのことも考慮すると、労働と仕事とは、現代においては似た内容をもつ概念として認識されていると解釈可能である。

労働哲学を主な研究対象としている内山節<sup>(15)</sup>は、日本の近代成立の過程を俯瞰し、近代化による労働の世界へ警めを提言してきた。彼は賃労働を狭義の労働と規定し、それと比較しながら広義の労働について持論を展開する。それは人間の一生そのものが、労働の積み重ねのな

かに実現し、つねに何かをつくり出しながら生きていくという労働の世界観である。そして、これこそが人間本来の生きている世界であるべきだという<sup>(16)</sup>。この広義の労働の概念は生命と一体としての労働と同様の意と認識できる。彼の見解については、現代の労働にとって示唆的であるのを後述する。

## 2. 日本の社会構造の概観

### 2.1 日本の近代社会の原型

日本の民衆の歴史をたどると、有史から中世までの庶民の生活形態は家父長制的であり、自立した小農経営の形態ではない農民が大半であった。それが江戸期に入りようやく小農という形態が出現してくる<sup>(17)</sup>。その後、農業と工業そして商業の分化の萌芽が、この時代を特徴づけるものの1つである。大石慎三郎と中根千枝の『江戸時代と近代化』には多角的な視点で江戸時代が検討され、この時代の産業構造の変容過程が詳細に解説されている<sup>(18)</sup>。そこでは江戸時代の代表的工業として木綿工業に焦点が当てられている。木綿は16世紀頃に大衆衣料として浸透してきた。その流れのなかで問屋制が生まれ、景気の良い時は急激な資本蓄積も可能となった。18世紀には、都市の問屋商人が全国的な商品流通を支配するようになる。また18世紀以降、綿作地帯の中に工業地帯が分離して綿織物工業が成立する。このような経済の発展に従い、農業・工業・商業の分離は進行していった。労働形態の多くは小資本家的な経営と言われており、自身は農業を営むが雇用労働も行う形である。また問屋制家内工業やマニファクチュアも多く現れてきた<sup>(19)</sup>。元禄時代には貨幣獲得を目的に家族労働力を用いて商品生産を行う単純商品生産と、他人の労働力を購入して家族労働力の補助としながら商品生産を行う資本主義的商品生産の主に2つの形態が併存していた<sup>(20)</sup>。こうして日本は、19世紀の末には初期資本主義の段階へ突入していった<sup>(21)</sup>。このような産業構造と労働形態の変化を生み出したことが、江戸時代が近代の原型といわれる理由である。

### 2.2 近代<sup>(22)</sup>と資本主義経済

日本における資本主義経済が形成される背景を検討する。前項で述べたように江戸時代から資本主義的経済の原型は形成されていた。それが明治時代を経て終戦後にその浸透は加速していった。それは国家形成との関連を帯びているのだが、国家と資本そして個人との関係性を統合的に捉えた東條由紀彦の『近代・労働・市民社会—近代日本の歴史認識Ⅰ—』は参考にすべき点が多く含まれている。東條の分析によると国家とは人格を認める主体で、またその必要から導かれたものである。人格を認めることで、国家は諸個人に内面化された。国家とは人々の人格が問題にされるような「場」のことであり、そのような事柄が問題にされるような時と所に在るものである。こうして単一の市民社会、資本のヘゲモニーは、人格承認の直接の帰結であり現在もその機能を果たしているという<sup>(23)</sup>。このように国民国家とそれに追隨する市民社会の成立の関わりが近代労働の構造の土台である。その手法として国が個人としての彼・彼女を

承認するという関係性を築いてきた。このことは資本が労働者の人格を承認する段階にまで権力が及ぶものである。直接的に国家に人格承認まで支配されていると認識している人はそう多くはないであろう。だが、そのような人々の自覚とは別の事柄として、資本を介してのそれを果たすような社会構造が現代にはあると分析できる。

現代の労働の構造に視座を移して分析を進める。現代の就業形態は賃労働が主である<sup>(24)</sup>。賃労働者とは、資本主義システムに則って収入を得ることを主な目的とした労働である。労働者側にとっての、その構造の欠陥を内山は指摘している。

経済過程を、商品を生産する経済過程として分析するとき、一つの問題点が生まれる<sup>(25)</sup>。それは商品の生産過程においては、労働者は労働力商品という特殊な使用価値をもった商品として扱われるということである。言葉を換えると経済学は、労働者を労働力商品として純化した概念にすることによって生産過程の法則を導き出した。その場合労働者という主体<sup>(26)</sup>の存在が成立しないのである<sup>(27)</sup>。つまり資本主義経済のシステムが必然的に賃労働者をもたらしたのである。「労働力は、その所有者たる賃労働者が資本（家）に売る一商品である」（Marx, 1849）<sup>(28)</sup>。と、この時代に資本主義経済の発展と共に犠牲になった労働者の在りようを目の当たりにしたマルクスは『賃労働と資本』において述べている。すなわち賃労働とは、労働力という商品である。そしてそれは、労働者のものではなく資本のものであると、既に明らかにされている。この理論は、資本主義経済の生産様式における指摘であるが、どの時代においてもその様式を採用する限りは、おのずと通底する根本的問題である。

現代の経済学者である武田晴人<sup>(29)</sup>は『仕事と日本人』のなかで、その現実を示唆している。資本主義システムが本格的に導入された初期でもある戦後日本の労働について、工場の経営上の都合から、人びとは自分の生活リズムを犠牲にして、交代制労働に従事することも求められるようになってきた。そして、工場で決められた時間は、決められた作業を行うための時間となり、人びとは労働の主人であることを否定されるようになったという<sup>(30)</sup>。

つまり資本主義システムの理論を採用した現代日本においても、資本主義システムと連動する労働者の主体の喪失の問題は引き継がれていると解釈可能である。

### 2.3 労使関係の歴史的文脈

マルクスの初期の著書『経済学・哲学草稿』のなかでは、資本家と労働者との関係性について詳細な分析がなされている。

人間への需要が人間の生産をきびしく規制するのは、あらゆる商品の場合と変わらない。供給が需要を大きく上まわれれば、労働者の一部は乞食や飢餓へと追い込まれる。労働者が生存できるかどうかは、あらゆる商品が存在できるかと同じ条件下にある。労働者は一個の商品となっているので、自分を売りつけることができれば運がいいと言える。そして労働者の生活を左右する需要は、金持や資本家の気まぐれに左右される。供給量が需要を上



まわれれば、価格を構成する利潤、地代、賃金の一部が価格以下で支払われ、割に合わないその一部は生産に利用されなくなり、こうして市場価格は自然価格という中心点に引き寄せられる。しかし、(一) 大規模な分業がおこなわれている所では、労働者にとって、労働を別の方向に向けることはきわめて困難であり、(二) 資本家に従属せざるをえない関係にあるため、まずもって不利益を蒙るのは労働者だ (Marx, 1844)<sup>(31)</sup>。

労働者と資本家がともに苦境にあるとき、労働者は生きていけるかどうかで苦しんでいるが、資本家は金もうけできるかどうかで苦しんでいる<sup>(32)</sup>。(一) 社会の富が崩れていくとき、もっとも被害を蒙るのが労働者だ。社会が順調なときでも労働者階級は所有者階級ほど利益を得るわけではないけれども、不況の苦しみを労働者階級ほど残酷に受けるものはない。(二) 富が増進する社会を取り上げる。これは労働者に有利な唯一の状態である。ここでは資本家のあいだに競争が起こり、労働者に対する需要が供給を上まわる。しかし、一つには、賃金の上昇が超過労働の原因となる。稼ぎを多くしようとするれば、自分の時間を犠牲にし、すべての自由を完全に放棄して、所有欲のために奴隷労働を実行しなければならない。そうやって寿命を縮めることになる。労働者の短命は労働者階級全体にとっては都合のよい事態といえる。短命ゆえにつねに新たな供給が必要となるのだから。労働者階級は、全体の没落を防ぐために、その一部をつねに犠牲にしなければならないのだ<sup>(33)</sup>。もう一つ、社会の富が増進するのはどんな場合なのだろうか。一国の資本と資本利が増加するような場合だ。それが可能となるには、(α) 多くの労働が寄せ集められねばならない。資本とは積み上げられた労働なのだから。となれば、労働者の生産物はますます労働者の手から奪い取られ、かれ自身の労働はますます他人の所有に帰し、かれの生存と活動の手段はますます資本家の手に集中する。(β) 資本の蓄積は分業を促進し、分業は資本の蓄積を大きくする。分業の促進と資本の蓄積にもなって、労働者はますます労働に依存し、特定の、きわめて一面的な、機械に類する労働に依存することになる<sup>(34)</sup>。かくて、労働者にとって最善の社会状態においてさえ、労働者は、当然の結果として、過重労働と早死、機械への転落、危険なまでに蓄積される資本への隷属、新たな競争、仲間の一部の餓死と乞食に直面せざるをえないのだ (Marx, 1844)<sup>(35)</sup>。

労働力商品としての労働は、自分以外の条件によって生活の糧を得られないばかりか生命すら脅かす性質をはらむのである。社会の富が増幅する時でさえ、賃金上昇による超過労働を引き起こし、労働の蓄積は資本家に集中する。社会の富が崩れる時、労働者が健康や生命を脅かす事態であっても、資本家の不利益は労働者程には至らない。このように資本と労働者との関係性では圧倒的に労働者が不利益であると、マルクスは労働者側の視点に添って解析している。ここで述べられていることは、この時代に限られた内容ではない。資本主義経済のもとの全ての時代と諸国の労働者に適用するのである。

## 2.4 企業という制度

以上の前提を踏まえた上で、日本の企業について考えてみる。日本の企業はマルクスの分析を実証する好例である。近代の日本における三浦の「企業と人間—構造的関わり—」を参考にしてみると、企業と人間との関係性が対等ではないのが見えてくる。労働者の処遇は企業の裁量次第であることを前提に、彼は企業を制度に置き換えて問題提起をしている。それは素朴な生産活動の場合、それが制度化しても、その成果はこれに関わった人々の生活に直接的に取り入れられていった。しかし制度が主体となった生産活動は、制度の判断によって生み出されるので、必ずしもそれが、それに関わった人々の生活を直接的に潤うものではなくともなるというのである<sup>(36)</sup>。これを労働者個人の生活に当てはめて解説すると、一人一人は生産活動に部分的に関わり、ものを作り出す充足感を制度に譲り渡しながらか、そこから得られる賃金収入によって生活を成り立たせていこうとするようになる。個々人が組織化された制度で果たす労働と生産的行為の間には開きが出てくる。こうした傾向は企業という制度による生産活動が本格化し始めた頃から現れだしているのだが、今や殆どその頂点に達しているというのである<sup>(37)</sup>。

このように企業という制度のなかで労働者は、生産活動の一部分を担う形で労働をしている。その労働の成果としての喜びを企業に譲り、労働者自身は収入を得ることで充足を得る形に治まっている。言い換えると、生産性を向上させるために分業が有効である。それを繰り返し重ねることが、分業という形での労働の場を増加させる。それにより近代における労働の主流の形を賃労働者に変えたともいえよう。その結果、人間たちは企業などに雇われる形でしか生存できなくなり、いつしか労働の喜びは生産そのものの喜びではなくなった。代わりにそれは収入を得ることの喜びに置き換えられた。

人間たちが労働力商品として資本のものになり分業の一部を担う時、さらに資本がその生産性を向上させるため労働の合理化に拍車をかける時、労働者は生そのものの労働を一層に喪失していく。東条<sup>(38)</sup>は『近代・労働・市民社会—近代日本の歴史認識Ⅰ—』において三浦と同見解を示しており、資本における生産過程の進行は、職場において非人格的「物」を要求したという見方ができる<sup>(39)</sup>。現代の経営は職務体系を掌握し、それに基づき仕事の編成を行なっている。その仕組みによって労働者の行為は、相互に代替可能で無差別的な「労働力」の、処分として扱われる。人間より先に仕事があり、経営にとっての課題は、あらかじめ定められた作業編成・プロセスとそれによって分節化された職務体系への「モノ」としての「労働力」の割り振り・役割付けであり、労務管理がそれに当たる<sup>(40)</sup>。このように利潤追求を最優先目的とした労働は、運営の効率を図るための分業と調整を備えている。その傾向が高まる程に、生身の人間である労働者は「モノ」としての労働力に収められる。この状態は労働者にとって労働そのものについて議論する余地がなくなる。主体は、常に資本あるいは企業側になる。生産性は労働者に求められる最大の価値となる。人間の機械化と表現しても大袈裟ではない。このことは後に述べる疎外された労働の発露といえよう。

## 2.5 人間の本質としての疎外

疎外概念はヘーゲルに発し19世紀にカール・マルクスらによって発展させられた概念である。マルクスは『経済学・哲学草稿』のなかで、その概念が労働者に与える影響を描いている。パッペンハイム<sup>(41)</sup>はマルクスよりも約1世紀後に生きたドイツの哲学・社会学者であり、『近代人の疎外』の中で、一度は終息しかかっていた疎外に関する議論を再燃させた人物である。その著者の冒頭で、パッペンハイムは疎外概念について問題提起している。

われわれが疎外を人間の条件に根ざすものと見ないで、特定の歴史的時期に関係されることは、問題をあまりにも単純化することにならないだろうか？<sup>(42)</sup>。疎外の力がわれわれの時代を支配しているという命題は、それ以前の時代にはそういう力は存在しなかったという意味ではない。この命題が実際に主張しているのは、そうした力が近代世界において非  
常な強度と重大性をもつようになったということである (Pappenheim, 1959)<sup>(43)</sup>。

このことは、資本主義経済のもとだから現代の労働疎外という形で問題視されているが、疎外概念は問題視されるまで存在していなかったのではない。疎外は元々人間に備わるどうしようもない本質であるという。マルクスは労働を対象化する過程における、労働者にとっての疎外問題を論じてきた。疎外は人間たちの本質であるから、人間たちの生活から根絶させることは不可能であるというのだ。『近代人の疎外』の末章において、人間の疎外は近代の時代にかぎられるものではなく、終には人間存在の普遍的な運命として理解されなければならないと結論づけている<sup>(44)</sup>。その結論に対して疎外を乗り越えようとするとしても、乗り越えられずに諦めて生きるしかない<sup>(45)</sup>。これらの議論を受け、人間の本質に疎外が備わるという命題に、筆者は同意している。言語を含むものづくり、他者と関係を持つあらゆる手段は、何かしらの認識を伴うのが人間である。その認識そのものは、対象化と呼ばれるものであり、人間から発されたものであっても、その人そのものではないからである。そうであるなら、それを受け入れ、これからの労働世界を構築する必要性が求められよう。また同時に貨幣価値が最大という資本主義構造と連動しながら、もたらされた労働疎外が現代抱えている問題と捉えるべきである。

## 2.6 疎外とは自己喪失である

パッペンハイムの疎外論の原型となったマルクスの疎外論について理解を深めよう。

労働者は、自分の生産する富が大きくなればなるほど、自分の生産活動の力と規模が大きくなればなるほど、みずからは貧しくなる。商品をたくさん作れば作るほど、かれ自身は安価な商品になる。物の世界の価値が高まるに比例して、人間の世界の価値が低下していく。労働は商品を生産するだけではない。労働と労働者とを商品として生産する。商品生



産が盛んになるにつれて、労働と労働者の商品化の度合いも大きくなる (Marx,1844)<sup>(46)</sup>。

労働の生産物は、労働が対象のうちに固定されて物となった姿であり、労働の対象化だ<sup>(47)</sup>。労働の対象化が、対象の喪失ないし対象の隷属としてあらわれ、対象の獲得が、対象の疎外ないし外化としてあらわれる<sup>(48)</sup>。労働が対象の形をとること、それが疎外としてあらわれるのだが、この疎外は、労働者が対象を生産すればするほど、所有できる対象はそれだけ少なくなり、かれは自分の生み出した資本にそれだけ大きく支配される、という形で進行する<sup>(49)</sup>。生産物の形を取った労働者の外化は、かれの労働が対象となり外的存在となるという意味をもつだけでなく<sup>(50)</sup>、かれが対象に投入した生命が疎遠なものとしてかれに敵対することを意味する<sup>(51)</sup>。

疎外化された労働の中で労働者は、労働のなかで自分を肯定するのではなく否定し、心地よく感じるのではなく不仕合わせに感じ、肉体的・精神的エネルギーをのびのびと外に開くのではなく、肉体をすりへらし、精神を荒廃させる。だから、労働者は労働の外で初めて自分を取りもどし、労働のなかでは自分を亡くしている。労働していないときに安らぎの境地にあり、労働しているときは安らげない。かれの労働は自由意志にもとづくものではなく、他から強制された強制労働だ。欲求を満足させるものではなく、自分の外にある欲求を満足させる手段にすぎない<sup>(52)</sup>。疎外された労働は、人間から、(一) 自然を疎外し、(二) 人間自身を、人間自身の活動を、人間の生命活動を疎外し、その上に、人間から類を疎外する。類的生活を個人的生活の手段にしてしまうのがその疎外だ<sup>(53)</sup>。さらには、類的存在が人間から疎外されているということは、人間が他の人間から疎外され、人間の一人一人が人間の本質から疎外されているということだ (Marx,1844)<sup>(54)</sup>。

これらのことから、人間の本質からの疎外とは、商品を生産する労働による自己の喪失に言い換えられると筆者は解釈している。自分自身を対象化することでしか認識することができないのが人間である。対象化すると人間そのものを完全に表現するのはほとんど不可能であり、自身の何かしら一部分を喪失するといえる。つまり社会構造の如何に問わず人間疎外は適用されうるのであり、資本主義社会構造のもとでは人間疎外すなわち自己喪失は人間の本質といえる。

### 3. 疎外の回復としての「生」の回復

疎外の克服について、マルクスの疎外論に端を発し、国内外で多くの試みが発表された<sup>(55)</sup>。あるいは18世紀イギリスにおけるアーツ・アンド・クラフツに代表される文化運動等の芸術論がある<sup>(56)</sup>。この運動はマルクス思想に影響を受けており、近代化によって変容する労働へと美の回復を訴えた近代化への批判が根底には在る。

17世紀以降、科学的・合理的思考がヨーロッパ世界に浸透してきた。この思考への批判的な

動きの代表として、各々に独自性を備えた実存思想が展開された。本論文では、その思想家の一人であるメルロ＝ポンティ<sup>(57)</sup>の『知覚の現象学1』を軸とした、身体論の視点を通して疎外の克服、言い換えると「生」の回復について考察する。

### 3.1 メルロ＝ポンティの「世界経験」概念について

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学1』の序章に彼の論理の中核を為す世界経験 (expérience du monde) の概念を説明している。近代以降の科学思考への批判が込められており、身体の現象学として彼の論理は展開される。

私が世界について知っている一切のことは、たとえそれが科学によって知られたものであっても、まず私の視界から、つまり世界経験 (expérience du monde) から出発して私はそれを知るのであって、この世界経験がなければ、科学の使う諸記号もすっかり意味を喪失してしまうであろう。科学の全領域は生きられた世界のうえに構成されているものであるから、もしもわれわれが科学自体を厳密に考えて、その意味と有効範囲とを正確に評価しようと思うならば、われわれはまず何よりもこの世界経験を呼び覚まねばならないのであって、科学とはこの世界経験の二次的な表現でしかないのである。科学は知覚された世界と同一の存在意義はもっていないし、また今後もけっしてつことはないのである。その理由は簡単であって、科学は知覚された世界についての一つの規定または説明でしかないからだ (Merleau-Ponty, 1945)<sup>(58)</sup>。

これによると、知覚が捉えたものは世界経験という人間存在の全体性である。科学が捉えたもの、つまり言語を含めた記号や数値が示すものは、世界経験という人間存在の全体性的一部分であると解釈可能である。

これより本論文にて規定した「生」の回復とはメルロ＝ポンティのいう世界経験を呼び覚ますことと同義であると筆者は解釈している。メルロ＝ポンティは知覚の概念を現象学として考察することで、人間の全体性を描きだそうとした。彼の知覚の現象学に理解を深めることは、「生」の回復に寄与すると考える。

### 3.2 身体は「生」への啓示

「生」の回復すなわち世界経験を呼び覚ますことには、身体概念を現象学として理解することから試みたい。

身体は知覚する主観と知覚される世界とを、ともに、われわれに啓示することであろう (Merleau-Ponty, 1945)<sup>(59)</sup>。

身体とは、自身にとって他者が何者であるかをあらわし示す働きがあるという。このことはまた、次のような一文がさらに裏付けとなる。メルロ＝ポンティは幻影肢を例に取り上げて、身体全体に意識と精神の存在を認めている。

身体の意識は身体全体に浸透しており、身体の中の部分にも精神が拡散していて、身体の行動は身体の中枢部門をはみ出してしまっている (Merleau-Ponty, 1945)<sup>(60)</sup>。

意識が人間たち個人の脳に局限して内在するのではないという見方が、現象学には共通の認識である。19世紀以降に、この考えは日本においても受け入れられてゆく。

身体は世界の中に埋め込まれていて、世界の中から身体が生起してくる、という構造がある<sup>(61)</sup>。二十世紀になるとはっきり、世界の中に埋め込まれ、世界とかかわるという仕方ではかたがたにない身体をもった現実存在—いわゆる世界内存在—として人間を考えるようになります (市川, 1985)<sup>(62)</sup>。

このように身体には、意識が備わっている。それは人間の個体という身体の輪郭を飛び越えて、空間に飛び出しているのである。つまりメルロ＝ポンティの示す身体は、知覚的経験で捉えられる人間の全体性を示している。それは人間個体を超えたものとして、世界のなかに埋め込まれていることから、他者と共有された存在の全体性といえる。この全体性とは、本論文に読み替えると、「生」を表現するものと考えられる。

### 3.3 人間たちの主体としての「生」

本論文における人間の「生」はメルロ＝ポンティの言葉を借りると「身体」である。それは世界のなかに埋め込まれる形で存在していることを説明してきた。その場合の主体の存在位置を確認しておく。

私は私の身体によってこそ他者を了解するのであり、それはちょうど、私が私の身体によってこそ〈物〉を知覚するのと一般である。そして、このようにして〈了解された〉〔他者の〕所作の意味は、その所作の背後に在るのではなくて、その所作が描き出している世界の構造、そしてやがて今度は私の方で捉え直すことになる世界の構造とまじり合っているのであり、その所作そのもののうえに自己を開陳しているのである (Merleau-Ponty, 1945)<sup>(63)</sup>。

われわれの身体は、単に他の一切の表出空間とならぶ一表出空間にとどまるものではない。そのようなものとしては、それは構成された身体でしかない。身体はむしろ他の一切

の表出空間の根源であり、表出の運動そのものであり、それによってはじめて意味が一つの場所を与えられて外部に投射され、意味がわれわれの手もとに、われわれの眼下に物として存在しはじめるようになるのである (Merleau-Ponty, 1945)<sup>(64)</sup>。

このように、知覚的経験には他者と共有された「生」に主体がある。その「生」によって人間は物事を了解している。主体の知覚を言葉として外化するのであれば、その了解の一部を自覚することはできるだろう。そうでなければ無自覚の場合も十分にありうる。他者との主体が個人ではなく他者との間に存在する了解は、知覚的経験を通じて可能になる。それは人間にとっての「生」の了解と考えられる。

メルロ＝ポンティの現象学の視点で知覚の概念を既述することで、人間の本質は「生」によって共有された存在としての在り方が見えてきた。人間の主体は他者と共有された「生」にあり、その了解は知覚的経験が伝えるものと理解可能である。

### 3.4 「生」と時空の概念

これまで人間の「生」を他者との関係性の観点から記述してきた。それにより人間の主体は他者と共有された「生」にあると明らかにされる。

それを踏まえて、世界を構成する時空の概念と「生」の在り方について、再びメルロ＝ポンティの言説を手がかりに確認したい。

現在の知覚とは、要するに、たがいに含み合う一連の過去の諸位置を、現在の位置に支えられて再把握するところに成立するものである。けれども、すぐつづいておこる未来の位置もまた現在のなかに含みこまれている。

私が身体をもっており、その身体をつうじて世界のなかで行動しているかぎり、空間と時間とは、私にとって、並列された点の総計ではない。のみならず、私の意識によって総合されるような、また私の意識によって私の身体が引き込まれてゆくような、無限の諸関係といったものでもない。私は空間と時間のなかに存在しているのではないし、私は空間と時間とを思惟の対象としているのではない。私は空間と時間にぞくしているのであり、私の身体はそれらに貼りつき、それを包摂している (Merleau-Ponty, 1945)<sup>(65)</sup>。

本論文でいう「生」すなわち身体としての人間は、時空そのものである。だから他者と共有されているといえよう。そのような人間の存在の仕方があるがゆえに、人は未来の人々の「生」を想い、また過去の歴史を重んじて現在を生きることが可能になる。あるいは民族や国の境界を越えて、物事をおこそうと動機を持つものと理解できる。人間が、個に限定された存在であれば、時空を超えた他者との共感を引き起こされないと筆者は考えている。

#### 4. 人間疎外と「生」の回復について

本論文では初めに、生命と一体としての「労働」の概念と、近代の主な形態として賃労働とを概念の分類として前提に述べた。その上で、近代の労働の形成過程を俯瞰的に辿ってきた。それにより近代社会形成の過程と資本主義経済システムを背景に労働システムが成立してきたと分析した。更に、その過程は人間の本質でもある労働および人間疎外が問題の根幹にあると明らかにしてきた。マルクスの疎外論についての議論を受けて、筆者はメルロ＝ポンティの視点を借りることで、人間疎外すなわち「生」の回復への手がかりを得られるのではと考えた。

そこで、身体の現象学の概念を用いることにより、人間の「生」を捉える試みを行った。その結果、人間の「生」の概念は時空の概念を超えて共有されていること。また人間の主体は他者と共有された「生」にあり、それは知覚的経験によって了解を可能にすることを説明してきた。

筆者は、冒頭で労働の概念を2つに大別した。上記のメルロ＝ポンティの学説から導出された結果を、労働の概念に重ねて捉えてみる。そうすると、本論文でいう「生」は生命と一体としての労働概念と解釈可能である。したがって、人間の本質としての疎外を克服ないしは止揚すること、すなわち「生」の回復は人間に備わる知覚的経験の回復であると導出できる。

今日のわれわれが生きる社会は、科学技術の発展に伴い、生活の利便性には寄与したと言える。だが、一方で科学的に高度に発展した社会は、人間たちに本来備わる「生」を喪失していると考えられる。

本論文の試みの帰結として、疎外によって喪失した自身と他者の「生」の回復のためには、「知覚的経験で世界を了解する」という視点の必要性を提起したい。



## 【注】

- (1) Karl Heinrich Marx (1818～1883) ドイツの哲学・経済学者。法律家の父をもつユダヤ人家庭に生まれた。経済学・労働理論において最も影響を与えた人物の一人。1836年、ボン大学を経てベルリン大学に移った際にヘーゲル哲学へと傾倒。その後フォイエルバッハの「人間の自己疎外」の克服を目指す思想に共感した。社会運動家。共産主義社会に理想を掲げた。才能は早熟で若くして『経済学・哲学草稿』を執筆。労働疎外の問題を指摘し取り組む。その後『経済学批判』『資本論』を執筆し、資本主義を批判的に考察した。
- (2) ジョルジュ・ルフラン著、小野崎晶裕訳『労働と労働者の歴史』芸立出版株式会社(1981) 6頁(原著“*HISTOIRE DU TRAVAIL ET DES TRAVAILLEURS*” 1975) 原著としては第2版に当たるが初版(1957)から大幅に内容の改定が加えられていることから第2版を参考にする。
- (3) 今村仁司(1998)『近代の労働観』岩波新書 5頁  
今村仁司(1942～2007) 岐阜県出身。京都大学経済学部大学院博士課程修了。日本の社会哲学・現代思想史学者。労働と暴力を主とした論考を発表。ジャン＝フランソワ・リオタールやベンヤミン等のフランスを主とした訳書を手掛けた。
- (4) Hannah Arendt (1906～1975) ドイツのユダヤ人家庭に生まれる。政治哲学者。ハイデガーやヤスパースが師である。1933年、ナチスのユダヤ人迫害を逃れるためにフランスへ亡命。1941年にはアメリカへ亡命。フッサールやマルクスにも影響を受ける。大衆社会へ批判的立場をとった。著作として『全体主義への起源』(1951) など。
- (5) ハンナ・アレント著、志水速雄訳(1994)『人間の条件』ちくま学芸文庫 135頁(原著“*The Human Condition*” 1958)
- (6) 今村仁司(1998)『近代の労働観』岩波新書 10頁
- (7) ジョルジュ・ルフラン著、小野崎晶裕訳(1981)『労働と労働者の歴史』芸立出版株式会社 6頁(原著“*HISTOIRE DU TRAVAIL ET DES TRAVAILLEURS*” 1975) 初版(1957)から大幅に内容の改訂が加えられたことから第2版を活用する。
- (8) 濱本真男(2011)『「労働」の哲学 人を労働させる権力について』河出書房新社 15頁
- (9) 同上、18頁
- (10) ハンナ・アレント著、志水速雄訳(1994)『人間の条件』ちくま学芸文庫 19-20頁(原著“*The Human Condition*” 1958)
- (11) 「労働labor」、「仕事work」、「活動action」という3つの「人間の条件」を、それぞれ比較的に検討し、その正体を明らかにしている。その過程を経て人間の本質を論究している。それについて深く考察するのは本論文の目的としていない。そのため仕事と労働の明確な区別がなされずに用いられてきたのを、アレントは批判的に述べているのを確認するに留める。
- (12) 武田晴人(2008)『仕事と日本人』ちくま新書 41頁
- (13) 新村出編(1955=1998)『広辞苑 第五版』岩波書店 2845頁
- (14) 同上、1159頁
- (15) 内山節。(1950年生まれ) 哲学者。自然・労働・社会・人間など普遍的テーマを幅広く考察している。東京と群馬県上野村を往復して生活。著書として『文明の災禍』(2011)『怯えの時代』(2009)『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』(2007) など。
- (16) 内山節(1989)『自然・労働・協同社会の理論—新しい関係論をめざして—』農山漁村文化協会 20頁
- (17) 大石慎三郎、中根千枝(1968)『江戸時代と近代化』筑摩書房 9頁
- (18) 中村哲(1968)『農業・工業・商業の結びつきと分離の中で』51-64頁〔大石慎三郎、中根千枝『江戸時代と近代』筑摩書房〕
- (19) 大石慎三郎、中根千枝(1968)『江戸時代と近代化』筑摩書房 54頁
- (20) 高尾一彦(1968)『近世の庶民文化』岩波書店 24頁
- (21) 大石慎三郎、中根千枝(1968)『江戸時代と近代化』筑摩書房 59頁

- (22) アメリカで開発された「テーラーシステム」という工場管理システムが日本でも明治末から昭和初期にかけて工場現場で導入された。このことにより日本における賃労働者の形が築かれた〔武田晴人（2008）『仕事と日本人』筑摩書房 146頁〕。
- (23) 東條由紀彦（2005）『近代・労働・市民社会—近代日本の歴史認識Ⅰ—』ミネルヴァ書房 426頁
- (24) 平成23年3月1日付け総務省統計局「労働力調査」より、就業者数は6204万人であり、その内雇用者数は5464万人。
- (25) 内山節（1976）『労働過程論ノート』田畑書店（1984）増補版 33頁
- (26) ここでの「主体」とは、労働の担い手という意味で使用している。
- (27) 内山節（1976）『労働過程論ノート』田畑書店（1984）増補版 34頁
- (28) カール・マルクス著、長谷部文雄訳（1935）『賃労働と資本』岩波書店44頁（原著“*LOHNARBEIT UND KAPITAL*”1849）
- (29) 武田晴人（1949年生まれ）経済学者。日本経済史が専攻。
- (30) 武田晴人（2008）『仕事と日本人』ちくま新書 154頁
- (31) カール・マルクス著、長谷川宏訳（2010）『経済学・哲学草稿』光文社 18-19頁〔アドラツキー編『マルクス・エンゲルス全集』第一部第三巻にて初めて刊行された（1932）。〕三浦和男訳『経済学＝哲学手稿』青木書店（日本初刊1962）（原著“*Ökonomisch- philosophischeManuskripte*”1844）
- (32) 同上、20頁
- (33) 同上、21頁
- (34) 同上、21-22頁
- (35) 同上、23頁
- (36) 三浦雄二「企業と人間—構造的関わり—」（2004）『三田商学研究』第47巻、第2号77頁
- (37) 同上、77頁
- (38) 東條由紀彦（1953年生まれ）経済学者。著作（2004）『女性と労働 雇用・技術・家庭の英独日比較史研究』等。労働を主題とした業績が多数。
- (39) 東條由紀彦（2005）『近代・労働・市民社会—近代日本の歴史認識Ⅰ—』ミネルヴァ書房 424頁
- (40) 同上、422頁
- (41) Fritz Pappenheim（1902～1964）ドイツ生まれ。哲学・社会学者。1933年ヒットラーが権力を掌握した後スペインへと亡命。1939年、スペイン内乱を逃れるために南フランスへ渡るも一時強制収容所へと捕えられた。1941年アメリカへ渡りタラテディーガ大学で社会学の教鞭をとった。
- (42) F. パッペンハイム著、粟田賢三訳（1995）『近代人の疎外』同時代ライブラリー 7頁（日本初刊1960）（原著“*The Alienation of Modern Man*”1959）
- (43) 同上、7頁
- (44) 同上、128頁
- (45) 同上、158-159頁
- (46) カール・マルクス著、長谷川宏訳（2010）『経済学・哲学草稿』光文社91-92頁〔アドラツキー編『マルクス・エンゲルス全集』第一部第三巻にて初めて刊行された（1932）。〕三浦和男訳『経済学＝哲学手稿』青木書店（日本初刊1962）（原著“*Ökonomisch- philosophische Manuskripte*”1844）
- (47) 同上、92頁
- (48) 同上、92頁
- (49) 同上、92頁
- (50) 同上、92頁
- (51) 同上、94頁
- (52) 同上、96頁
- (53) 同上、101頁

- (54) 同上、104～105頁
- (55) アグネス・ヘラー著、良知力、小箕俊介共訳（1982）『マルクスの欲求理論』法政大学出版局 43頁（原著“*THEORIE DER BEDÜRFNISSE BEI MARX*” 1976）、杉村芳美『脱近代の労働観—人間にとって労働とは何か』ミネルヴァ出版（1990）、杉山康彦『芸術と疎外』紀伊國屋書店（1994）、中岡哲郎「職場のレポート4編を読んで／疎外への抵抗の人間の表現—それこそが合理化闘争の減点なのだ（職場からの報告（創刊150号記念特集／読者レポート）『月刊労働問題』等がある。いずれも疎外の概念を用いた分析および考察に留る。
- (56) 19世紀後半のイギリスにおいてジョン・ラスキンとウィリアム・モリスを中心に興したデザイン運動。資本主義社会が浸透し、機械化・産業化する社会に対して、伝統的職人の労働の中に美を発見することを目指した。  
ウィリアム・モリス著、中橋一夫訳『民衆の芸術』岩波書店（1953）86頁（原著“*The Art of the People*” 1879）において「疎外」の文言は用いられていない。だが、資本主義経済の浸透とともに職人達の労働に機械が持ち込まれ、商業は発展する。その交換として人間たちが、機械や商業の手段になる逆転現象をもたらしたと描かれ、筆者はこれを本論文でいう労働疎外の概念と同一の意味をもつと解釈している。
- (57) Maurice merleau-Ponty（1908～1961）フランスの哲学者。フランス高等師範学校在学中に実存哲学のサルトルら後の哲学者と交友がある。1931年より、高等中学校の哲学教授として教鞭をとる。1949年、パリ大学文学部教授。17世紀近代哲学と対立する立場を取り身体論に代表される現象学を発展させた。代表作には『意味と無意味』（1948）『眼と精神』（1963、1964）『見えるものと見えないもの』（1963）など。
- (58) M. メルロ＝ポンティ著、竹内芳郎・小木貞孝共訳（1967）『知覚の現象学1』みすず書房Ⅱ—Ⅲ頁（原著“*PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION*” 1945）
- (59) 同上、133頁
- (60) 同上、138頁
- (61) 市川浩・山口昌男共著（1985）「テキストとしての身体と解読行為としてのパフォーマンス」『別冊國文學・知の最前線 身体論とパフォーマンス』6頁
- (62) 同上、6頁
- (63) M. メルロ＝ポンティ著、竹内芳郎・小木貞孝共訳（1967）『知覚の現象学1』みすず書房 305頁（原著“*PHÉNOMÉNOLOGIE DE LA PERCEPTION*” 1945）
- (64) 同上、245頁
- (65) 同上、236頁

（平成25年11月6日受理）